

三朝小唄

詩・野口雨情
曲・中山晋平

泣いて別れりゃ サイシヨ
空までエ ヨイトヨイトサノサ くもる
くもりゃ三朝がヨ ヤレ三朝がヨ
雨となるヨ

みささ三朝と サイシヨ
皆様エ ヨイトヨイトサノサ いやる
恋のかけ橋ヨ ヤレかけ橋ヨ
あればこそヨ

「八 出雲の帰りにゃ またおいで
よらずに帰るは ふた心
その時や わたしが追ってくヨ」

三朝湯の神 サイシヨ
一人がエ ヨイトヨイトサノサ お好き
一人や寝しやせぬヨ やれ寝しやせぬヨ
帰しやせぬヨ

霧が深くて サイシヨ
三朝がエ ヨイトヨイトサノサ 見えぬ
三朝湯前はヨ ヤレ湯前はヨ
霧の中ヨ

「八 出雲の神様 縁結び
寄らなきゃあとから 追ってくよ
追いつきゃその時やかっちゃうよ」

三朝慕情

詩・高木友起夫
曲・栗山 邦豪

1. 春は嬉しや 花湯の祭り
桜花さく 並木道
鮎のささやき 三朝の川に
背を流した 河原風呂

2. 思い出します 恋谷橋で
逢うて嬉しい蛇の目傘
好いて好かれて 泣かせて泣いた
雨にしっとり 梨の花

3. 廿世紀も さかりを過ぎて
紅葉燃えたつ 小鹿溪
涙かくして 爪弾く三味は
三朝娘の 心意気

4. 人形峠の 別れの辛さ
逢うせ短い 恋なれど
暮る想いは 三徳の山へ
肌は白妙 雪化粧

5. いとし面影 心に抱いて
そぞろ歩けば 人恋し
伯耆三徳に 願いをこめて
仰ぐ月白 ただ淋し

三朝温泉の由来

今から約830年ほどむかし、源義朝の家臣大久保左馬之祐という人がいました。左馬之祐は平治の乱で滅んだ源氏の再興を祈願するため、山陰の霊場三徳山へ参詣にやってきました。

三徳山にお参りの途中、三朝の里で年老いた白い狼に出会いました。左馬之祐は腕に自慢の一矢で射殺そうと思いましたが、白い狼は神仏の使いかもしれないと思い、逃がしてやりました。

ところがその夜、白い狼の主である妙見大菩薩が夢枕に立ち、左馬之祐の生き物を思いやるあたたかい心に胸をうたれたと言い、一本の楠の株根を掘って見るがよいと告げました。

翌朝左馬之祐は、妙見大菩薩のお告げの場所に行き、株根のところを掘りました。ところがどうでしょう、透き通って輝くお湯が、こんこんと湧き出てきました。左馬之祐からこのことを教えられた村人たちは、この場所を「株湯」と名付けました。

